

田舎のお母さん

小川未明

青空文庫

奉公ほうこうをしていゝるおみつのところへ、田舎いなかの母親ははおやから小包こづつみがまいりました。あけてみると、着物きものがはいつていました。そして、母親ははおやからの手紙てがみには、

「さぞ、おまえも大きおおくなつたであらう。そのつもりでぬつたが、からだによくあうかどうかわかりません。とどいたら、着きてみてください。もしあわないようでしたら、夜分やぶんでもひまのときに、なおして着きてください。」と、書かいてありました。

おみつは自分じぶんのへやにはいつて、お母かあさんからおくつてきた着物ものをきてみました。田舎いなかにいるときには、お正しょう月がつになつてもこんな着物きものをきたことがなかつたと思おもいました。自分じぶんだけでなく、

村でもこんな美しい着物をきる娘は、なかつたのであります。

彼女は、しばらく自分のすがたに見とれていました。ちよう

どそこへ、坊ちゃんが外からたこをとりにはいつてきて、おみつ
のようすを見たので、

「みつ、それを着ると、なんだか田舎の子みたいになるよ。」と
いつて、笑いました。

おみつも、田舎では美しいのであろうけれど、都ではみんなが
もつと美しい着物を着ているから、あるいはそう見えるかもしれ
ないと思うと、急にはずかしくなつて、

「なぜ、お母さんはもつとはでなのをおくつてくださらなかつた
のだろう？ わざわざおくつてくださらずとも、自分がすきな

をこちらでこしらえればよかつたのに……。」と、心でいいながら、着物をぬいで、行李の中へしまつてしまいました。

晩になつて、おしごとがおわりました。彼女は自分のへやへ

はいつてひとりになると、しみじみとして田舎のことが考えられ

ました。行李から着物をとりだしました。村からあの峠をこして

母親が町へ出て、機屋でこの反物を買ひ、家にかえつてから

せつせとぬつて、おくつてくださつたのです。そう考えると、ま

た、いくたびかこのぬいかけた着物を手にとりあげて、

「娘にあうかしら？」と、首をかしげて見入られたであろう母

親のすがたさえ、目にうかんでくるのでした。

おみつは、お母さんの手紙を着物の上でひらいて、もういちど

よみかえしているうちに、あついなみだが、おのずと目の中からわいてくるのをおぼえました。

「せっかく、おくつてくださったのを、気に入らないなどいって、ぼちがあたるわ。」

そう思うと、彼女かのじよは心こころからありがたく感じて、すぐにお礼れいの手紙てがみを書いて、お母さんかあに出だしたのでした。

ある日ひ、おみつはお嬢さんじょうのおともをして、デパートへいったのであります。

「そんなじみな着物きものしかないの？」と、出でがけにお嬢さんじょうがおつしやいました。

おみつは、顔かおを赤あかくしましたが、心こころの中なかで、お母さんかあのおくつ

てくださったのを、たとえじみでもなんのはずかしいことがある
うかと、自分じぶんを上げましました。

ひろびろとしたデパートは、いろいろの品物しなものでかざりたてら
れていました。そして、そこはいつも春はるでありました。香水こうすいの
においがただよい、南洋なんようできのらんの花はながさき、美しいふうを
した男おとこや女おんながぞろぞろ歩あるいて、まるでこの世よの中なかの苦勞くろうを知らぬ
人ひとたちの集まりあつのようでありました。

「みつや、人ひとがみんな、おまえのふうを見てみいくじやないの。そ
んな田舎いなかふうをしているからなのよ、みつともないわ。」と、お
嬢じょうさんがいいました。

これをきくと、おみつはまだ若い娘わかむすめだけに、

「いくらお母さんかあがおくつてくださったのでも、ほかの着物きものを着てくればよかつた。」と、思おもいました。

お嬢さんじょうは買かい物ものをして、その包つつみをおみつに持もたせて、それから食しょく堂どうにはいつておみつもいつしよにご飯はんをたべ、コーヒ―をのんで、休やすみました。そして、そこを出でました。

「みつや、東北地方とうほくちほうの物産ぶつさんの展覧会てんらんかいがあるのよ。きつとおまえの国くにからも、なにか名物めいぶつが出でているでしょう。ちよつと見ましようね。」と、いつて、お嬢さんじょうは先さきになつてその会かい場じょうへおはいりになりました。

おみつも、その後あとからついてはいりました。

そこには、田舎いなかでつくられたおり物ものとか、道具どうぐとか、おもちゃ

のようなものがならべられてありました。デパートの他の売り場では見ることができないような、けばけばしくはないが、じみで美しい、おもしろみのある品物がありました。一つ一つ見て歩いていらしたお嬢さんは、ふいに足をとめて、

「ちよつと、ここにならんでいる反物は、おまえの国の町からなのよ。まあ、みつや、この反物は、おまえの着ているのと同じでないこと！」と、お嬢さんはおっしゃいました。

おみつもそれを見ると、しまがらがすこしちがつているだけで、まったく自分のと同じ手おり物でありました。つけてあるねだんを見て、お嬢さんは二度びつくりして、

「まあ、高いのね！」と、大きな声でおっしゃったので、そばに

いる人たちまでが陳列された反物とおみつの着物とを見くらべて、この女中さんはなかなかいい着物を着ているのだなどいわんばかりの顔つきをしたのであります。

おみつはそれを知ると、はじめて自分がいい着物をきているのを知ってうれしかったというよりか、自分の故郷ではこんない反物ができるといふことに、誇りを感じたのでした。やがて、会場からでるとお嬢さんは、

「ごめんなさい。みつの着ているのが、そんないい品だとは知らなかったので、悪口をいってすまなかつたわ。」と、いって、おわびをなさいました。

おみつはまた、顔を赤くしました。しかし心のうちでは、喜んで

でいたのであります。そして、お母^{かあ}さんをほんとうにありがたく
なつかしく感^{かん}じました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

底本の親本：「未明ひらかな童話読本」文教書院

1936（昭和11）年3月

初出：「台湾日日新報」

1936（昭和11）年3月24日

※表題は底本では、「田舎《いなか》のお母《かあ》さん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年6月9日作成

2016年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田舎のお母さん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>